人間と怪異の境界線はどこにあるのだろう。
社会が敷いた倫理を逸脱した瞬間、
人はそれを〝バケモノ〟と呼ぶのかもしれない。

始

アスファルトを照りつける太陽が重い雲に隠れ、空気がひやりと沈んだ。雷が鳴り、途端に叩きつけるような雨が降りだす。服は瞬く間に水を吸って肌へ貼りついた。焦りのまま走り、ようやく逃げ込んだ場所は寂れた団地の一棟だった。

廃墟、という言葉がすぐに浮かぶ。

コンクリートの壁は黒ずんで、床には瓦礫や廃材が散乱している。解体中なのか建設途中で放棄されたのか。人が立ち入らなくなったことで加速度的に朽ちていく建物独特の、不気味で重い空気が立ちこめていた。

スマホを開くと、圏外だった。地図も天気予報も読み込めない。再起動しても状況は変わらず、『現在地を取得できません』とエラーが繰り返し表示される。

（もしかしたら、ここだけ電波が悪いのかもしれない。少し移動すれば電波が拾えるだろう）

……そんな楽観は、すぐに打ち砕かれた。

どこまで歩いても電波が拾えない。それどころか入口までも見失ってしまった。次第に、同じ場所を巡り続けているのではないか、という疑念が胸をよぎる。名状しがたい焦燥に急き立てられ、歩調は無意識のうちに速まっていた。肌にまとわりつく湿り気が不快だ。それが汗なのか、雨なのかも判然としないまま、雫が顎先から落ちていく。

その時、視界の先にドアが見えた。隙間から微かに光が漏れている。

（助かった……。外に出られる）

扉を押し開けた瞬間、束の間の安堵は凍りついた。

誰か、いる。

傘も、コートも、髪までもが鮮やかな赤。男の存在は、雨が降る灰色の世界で異様なほど浮いていた。赤色に包まれた長身の足元に広がる影に目が吸い寄せられる。いやあれは影じゃない。

……血だ。

転がる亡骸は激しい暴力にあてられ不格好にひしゃげて、割れた頭蓋は潰れたザクロのようにその内側を晒している。夥しい量の血が流れだし、その上に彼は立っていた。

理解が追いつかない。

現実とは思いたくない。

心臓が激しく脈打ち、呼吸が荒くなる。込みあげる吐き気に口を押さえ、たたらを踏んだ。

男がゆっくりとこちらに顔を向ける。その背後から、もうひとり——誰かが現れた。

白いレインコート。

フードを深く被り、顔は影の内に隠されている。

小柄で華奢な手に、明らかに不釣り合いな武器が握られていた。

ぬらりと鈍い光を弾く鉄の先端から、血が滴り落ちる。

脳が本能的に叫ぶ。

(逃げろ。今すぐ逃げろ——!)

なのに脚は凍りついて動かない。

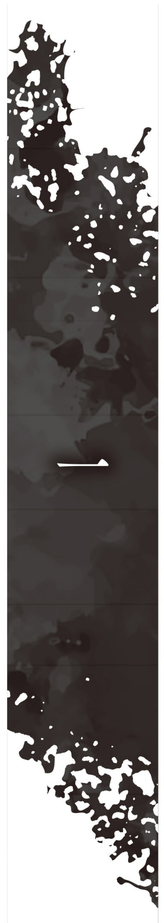
それがこちらへ近づいてくる。歩幅の小ささが、恐ろしかった。足取りの軽やかさが、悍ましかった。とっておきの遊びを心から楽しんでいる子どものように見えたから。

雷鳴が轟く。

稲妻に照らされた口元は、笑っていた。

衝撃とともに視界が染まっていく。赤く、赤く。

そして二度と、目覚めることはなかった。



一

耳を刺す音に、乱暴に引きずり起こされる。枕に顔を伏せたまま腕を伸ばし、手探りで音を止めた。再び眠りへ戻る余地はなく、掌中の端末から軽快な声が発せられた。

「もしもし、あだみ？　起きてた？」

はりつく瞼をこじ開けて画面に表示された〝お母さん〟の文字を睨む。

起きてた、ではなく起こされたが正しい。

「……今何時だと……」

「お昼ね」

「こっちは五時なのだけれど」

顔に掛かる髪を掻き上げながら身を起こす。カーテンの隙間から見える外はまだ薄青く、夜の気配を残している。そんな早朝の静けさとは対照的に、電話の声は真っ昼間の明るさだった。

「モーニングコールには早すぎたかしら。それより学校はどう？　楽しい？」

「問題なく高校生活を送っているのでご心配なく。眠いから用件だけ言ってほしい」

「つれないわねぇ……この間送ってくれた本が届いたの。ああいう古い専門書はこっちじゃ手に入らないから、本当に助かったわ。ありがとう」

「あー……あれのこと」

町外れの古本屋まで炎天下を歩かされた記憶がよみがえり、思わず顔をしかめた。どうもこの人は私を便利な代行業者のように考えている節がある。内心の呆れをよそに、電話の向こう側が急に騒がしくなった。

「あら、ごめんなさい。もう切らないと。お金はいつも通り入れておくから」

「まさか、本のお礼が用件？」

「そうよ。じゃあ身体に気をつけて。あ、パパにもたまには連絡してあげてね」

言うだけ言って一方的に通話が切れる。

呆然としたまま画面を見つめ、しばし身動きが取れなかった。お礼など、短いメッセージひとつで済む話だろうに。その程度の用件で早朝に起こされるのは、どうにも割に合わない。スマートフォンを枕元へ放り出し、再びベッドに身を横たえた。

なかなか眠気は戻ってこない。

迷惑な電話のせいか、それとも――夢のせいか。

電話で起こされる直前、夢を見ていた。昔から繰り返し見る悪夢だ。

夢の内容はそのたびに異なるけれど、結末だけはいつも同じだった。

高い場所から身ひとつで落ちていく〝私〟。

あの浮遊感を思い出すだけで胃のあたりがむかむかして背筋が寒くなる。体験したことなどないのに、やけに生々しくて現実感があった。そんな悪夢のせいか、いくら待っても眠気は戻らず、結局そのまま朝を迎えることになった。

あくびをこらえながら昇降口で靴を履き替え、教室に向かう。
自分の席に鞄を置いた途端、背中を叩かれ「おはよう」と声を掛けられた。
「うわ、顔色悪いね。また夜更かしでもしたの？」
「夜更かしというか……」
早朝の電話や、夢のことが頭をよぎる。両親が海外赴任中だという事情は話題にしづらく、夢の内容を口にする気にもなれなかった。夢占いを信じるならば、高所から落ちる夢はストレスや抑圧の表れだとあるので、変に心配されるのも面倒で当たり障りのない返事でその場をやり過ごす。
「キリがいいところまで本を読んでいたら、少し寝るのが遅くなっただけ。そんなに酷い？」
「うん、真っ白」
「今更じゃない？」
「そう言われるとそうかも。ま、あんま無理しないで。明日から夏休みだしさ」
……そうだ。今日は終業式。
明日から夏休みということで、教室の空気もどことなく浮き足立っている。
「そういえば、裏門の先の寂れたシャッター街……出たらしいよ」
「……何が？」
「不審者！　細い路地の隙間から通りを覗いてる男がいたんだって。しかも絶ッ対人間が入れないような狭い隙間から、目だけが見えたって！」
「ああ、そう……」
それなら犬か猫ではないのか、と心の中で思う。

もったいぶったわりに内容は曖昧で、肩透かしを食らった気分だった。ところが、何人かが会話に加わり、興味本位で騒ぎ始める。なぜか私の机の周りで話題が広がっていき、輪から抜けることもできなくなっていた。
「最近ほかにも流行ってるじゃん。ほらあれ、呪われた団地みたいな」
「あーね、ヤバい怪異も出るって噂だよね。まとめ動画で見たわ」
「まとめるほど怪異がいるのかよ」
誰かのひと言に、周囲から笑いが起こる。ネット上で広まるオカルト話など、誰も本気で信じてはいない。ひとしきり盛り上がったあと、話題はいつの間にか夏休みの予定へと移っていった。
やがて予鈴とともに、皆がそれぞれの席へと散っていく。
「さっきの話、ただの噂だと思うけど一応気をつけなよ。帰りあのシャッター街通るでしょ？」
「……そうだね。わかった」
ふと隣の空席に目を向ける。
幽霊や怪異、そんなものが本当に存在するのかはさておき、この世界には、解決されない事件や真相不明のままの事故が山ほどある。例えば、随分前から行方不明のクラスメイトとか。
「化之」
誰かが気配を潜めて近づいてきた。私の周りから誰もいなくなるのを見計らったタイミングで。
目を上げると、ひとりの男子生徒がいた。
彼が口を開く。
「――――、――――？」

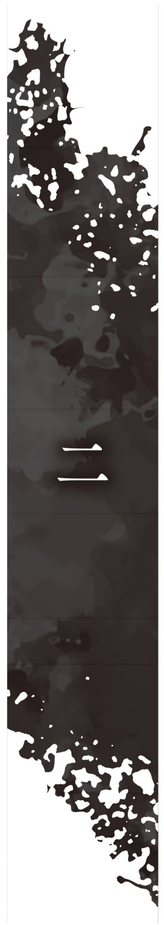
「え？」
聞き取れない。
水中に突き落とされたように音がこもっていて、彼が何と言ったのかわからなかった。
その直後。
頭に激しい痛みが走る。教室の机や椅子、黒板、人の顔さえも眩暈によって歪み、遠くに鳴く蟬の声が甲高い耳鳴りに上塗りされていく。
目の奥に金属を捻じ込まれたような穿痛に、思わず両手でまぶたを押さえた。

◇

次に目を開けた時、世界は音も色も光も、何もかも失っていた。
見慣れた教室ではなく目の前に広がるのは、無機質なコンクリートの壁と床、そして天井。すべてがくすんだ灰色で覆われており、一見すると廃病院の廊下のような空間だった。だが窓はなく、重苦しく湿った空気が足元から迫り上がり、全身に絡みついてくる。長く伸びた廊下の先は闇に飲まれ、終わりが見えない。
「……ここどこ？」
思わず声に出して問いかけるも、答えは当然どこからも返らない。
わからない。
酷い頭痛があったような気もするが……思い出せない。

さっきまで確かにあったはずの記憶が、頭からこぼれ落ちている。
廊下はひどく静まり返っていて、どんなに耳を澄ましても物音ひとつ聞こえなかった。音に意識を集中させると、自分の内側で逸る心臓の鼓動だけがドクドクとうるさく感じられた。
鉛を飲んだように重い身体を叱咤して、立ち上がる。支えを求めて壁に触れた瞬間、ぬるりとした感触があり、指先が滑った。夥しい血痕。
一見すると単なる染斑にも見えるそれは壁一面に広がり、既に模様の一部と化していた。なぜ壁が、これほどまでに血で汚されているのか。
（なんなの、ここ……）
その時、天井のライトが赤く明滅した。
ずり……ずり……。
砂利を詰めた麻袋を引くような重たい音が聞こえてくる。
数度の瞬きののち、暗闇だった廊下の先にそれは現れた。

SAMPLE



二

廊下の先に現れたひとつの黒い影が、こちらに向かって這うように近づいてきた。

ずり……ずり……。

影が近づくにつれ、硬い床を擦る音がやけに大きく聞こえて息を呑む。生き物らしき黒い影は、あたりの暗闇の中に溶け込んでおり、その姿を視界に捉えることはできない。

ずり……ずり……。

得体の知れぬ存在が数メートル先まで迫っているものの、あまりにも非現実的な状況に、足がその場に縫い付けられてしまう。突然、影が何か音を発する。

「ﾊﾞｽﾃｶﾞｻﾞｲﾃﾞｽﾈﾝ？　ﾏﾃﾞｽﾈﾝ？」

――言語？

聞き慣れない響きだった。区切りが曖昧で、それが何を意味するのかまるでわからない。私が黙っていると、さらに踏み込んでくる。天井に設えられた灯りに照らされ、その姿が鮮明になった。

男だ。
私の視線の先には長髪の男がいた。闇から這い出てきたかのように、両膝と両手を地についた格好をしている。背に沿って流れる黒髪は極端に長く、腰を通り越して床に垂れ広がっていた。肌は血の気を一切感じさせないほどに青白く、両目は髪に隠されてよく見えない。闇と同化しそうな黒い服から覗く両腕は筋張って逞しく、辛うじて性別が推測できる異質な風体だった。
そして何より異様なのは、生きているものに備わるはずの気配がない。外形は人に酷似しているのに、その生気のなさは、とても同じ〝人間〟とは思えなかった。
彼は床に両手をついたままこちらを見ている。
「ぺろロ？」
困惑に顔を曇らせていると、彼はまるで「どうしたのだろう？」と言わんばかりに首を傾げ、ぐっと腕に力を込めた。そして一気にこちらへ距離を詰めてきた。
「ひっ……！」
喉奥から、引き攣れた声が漏れる。次の瞬間には反射的に踵を返し、その場から逃げ出していた。
（今のは何……？）
理解が追いつかないまま廊下を進み、手当たり次第に扉を開けていく。だが、現れるのは似通った部屋ばかりだ。廃墟と化した地下迷宮を彷徨っている錯覚に陥る。
ただ殺風景なだけなら、ここまで不気味には感じなかっただろう。
血で汚れたコンクリートの壁。
乱雑に散らばるゴミ。

切れかけ、断続的に明滅する照明。
昏く淀んだ空間にひしめく寒々しい静寂。
そして、先ほど目にした異形。
この場所には窓が一切なく、外界の気配は遮断されている。今が昼なのか夜なのかすら、判別できなかった。それらが折り重なって生じる不快な感覚が、胃の奥に重く沈殿していく。
ここはどこ？
私はどうしてこんなところにいるのだろう？
教室で誰かに声を掛けられた、その直後から記憶が欠落している。その先を、どうしても思い出せない。思い返そうとするほど、霧が濃くなるように思考は空転してしまう。
（とにかく出口を探さないと……）
おぼろげな記憶を追うより、一刻も早く元いた場所へ戻ったほうが良い。
そう判断して足を速める。ここに留まってはいけない、そんな危機感が先に立つ。根拠はないが、それでも言い知れぬ予感に急き立てられ、次のドアを開けた。
ギィ……。
錆びた蝶番が軋む音を立てる。
コンクリート壁に四方を囲まれた部屋だった。広さは教室くらいありそうだが、ここにも窓はなく照明は天井から吊るされた裸電球がひとつ。薄闇の向こう、奥にあるドアの前に何か――布に覆われた塊が見える。私の身長よりも遥かに大きいその塊は、目を凝らしているうちに僅かに動いた。
「……！」

人だ。少なくとも人型の何か。

大きさからして……こちらも男性だろうか。

元の色が判別できないほど汚れ、裾がほつれた布をローブのように纏(まと)っている。くるぶし近くまで布が垂れ下がっているせいで体のラインが見えず、さらに頭部も目深に被(かぶ)ったフードで一切見えない。そして何より目を引いたのは、彼が手にしている柄の長い斧(おの)だった。明らかに何かを害するための武器だ。

彼が、頭だけをこちらに向けて私を見ている。目は暗がりに隠れているのに、視線を克明に感じた。部屋に半歩ほど入った私を見つめたまま微動だにしない。こちらに襲い掛かってくる気配はないが、万が一のことを考え引き返そうとした瞬間、不意に彼が口を開いた。

「[illegible]?」

聞き取れないがやはり言語のようだ。

「えっ……何語……？」

「[illegible]?」

私の呟(つぶや)きを拾って彼が言う。語尾が少し上がっているから、おそらく私に何か質問をしているのだろう。答えられずにいると、彼が腕を持ち上げる。ローブの袖から、影を凝縮させたような真っ黒い手が出てきた。そのまま彼は無骨な指先を自分自身に向ける。

「[illegible]」

そして次に私に手のひらを向け、指し示す。

「[illegible]」

なんとなくではあるが……一連の動きが示すものはおそらく『私』と『あなた』。

私が、彼らが使う言語を理解できないことを察して、教えてくれようとしているのかもしれない。彼はもう一度、指を往復させて『[illegible](私)』と『[illegible](あなた)』と発声してみせる。さらにこちらを指差したまま、今度はもうひとつ単語を加えた。

「[illegible](あなた)　[illegible]?」

「私のことを聞いている？」

教えられたばかりの『[illegible](あなた)』は聞き取れたけれど、続く音はなんだろうか。困った。だが、こういう時はとりあえず笑っておくに限る。笑顔で濁しておけば大概のことは解決する。そんな処世術が彼に有効かはわからないが、私がへらりと笑ってみせると、彼は指を下ろした。

「[illegible]」

（合っていた……？）

反応を見るに大きく間違ってはいなかったはず。フードのせいで表情どころか顔のパーツひとつさえ見えず、携えた斧の存在感が気になるけれど、やはり彼にこちらを攻撃する意図はないようだ。

敵意がないことが感じ取れたので、彼から意識を外し改めて部屋を見渡した。彼がいること以外、この部屋も今まで見てきた部屋と大差はない。

壁に沿って、いくつかのバケツが並んでいる。古びたトタン製のバケツ。ハンドルについた木製の持ち手はひび割れ、隙間から黒ずんだ斑点がじわじわと浸食していた。何か液体が入っているものもあり、くすんだ水面には油の膜が張っている。

ガタン！